

# パリのケ・ブランリー美術館を読む

## —開館記念会議録『諸文化の対話』を手がかりに—

清水 祐美子

### 目次

#### はじめに

- 1 本書『諸文化の対話』について
- 2 美術館と博物館との間で
- 3 「その橋を渡るために」
- 4 ケ・ブランリーの使命と課題

#### おわりに

#### はじめに

2006年6月、ケ・ブランリー美術館 (Musée du quai Branly : 以下MQBと記す) が開館した。セーヌ川を臨むケ・ブランリー (ブランリー河岸) の4万平方メートル余の広大な敷地に、大きな箱のような形をした褐色の建物が長々と横たわっている。フランスを代表する建築家ジャン・ヌーヴェルの作品である (写真1、地図参照)。長さ200メートル、高さ12メートルの巨大なガラスパネルでできたファサードを抜けると、来館者はシダの茂る庭に迎え入れられる。自然のジャングルを思わせる演出とモダンな建築物とが組み合わされたMQBの空間に対して、隣接するエッフェル塔やパリの高級住宅街の街並が借景となり興味深い効果を生み出している (写真2参照)。ここにはアジア、アフリカ、オセア

ニア、南北アメリカという「非西洋 (non-occidentaux)」の地域から集められた工芸品・織物・祭祀用具・武具などの約30万点が収蔵され、約3500点を展示する常設展のほか、大小3つの企画展示室・アトリエ・講義室・映画室・図書室・劇場等が設けられている。建設費総額2億35万ユーロ (352億5000万円)、初年度のコレクション購入費228万ユーロ (3億4200万円)、年間維持費4400万ユーロ (約66億円) という巨費を投じた施設である。運営資金としては企業からの多額のメセナに加え、国からも年間5300万ユーロ (約79億円) の助成金を得ている。「世界一値の張る美術館」とさえ言われる<sup>1</sup>。

この施設の計画が当時のシラク大統領 (1995年～2007年在職) より正式に発表されたのは1996年10月のことである。シラク大統領の任命した小委員会が草案の討議を重ね、人類博物館 (Musée de l'Homme) の収蔵品の大半ならびにアフリカ・オセアニア美術館 (Musée national des Arts d'Afrique et d'Océanie : 通称<sup>マオ</sup>MAAO) の全収蔵品を移管することを決定した。パリ市内

<sup>1</sup> Dupaigne (2006) pp. 214-219, Chouay (2007) p. 57, Martin (2007) p. 22, Dupaigne (2008) p. 646. 2006年開館当時の相場に従い、1ユーロ=150円のレートで円換算した。

の西部トロカデロに位置する人類博物館と、東端のヴァンセンヌの森の入口ポルト・ドレにある MAAO とに散在して収蔵されていた「非西洋」の文化財を一つの施設で一括して管理できるようにしようという意図である。当初はシャイヨー宮（人類博物館はその一角を占める）の建物を引き続き利用する計画だったが、1998 年に変更され、別の場所に新たな建物を新築することに決まった。結果、人類博物館は休館され、MAAO は閉館されることになった。また、時をほぼ同じくしてもう一つの民族誌博物館（musée ethnographique）の再編計画も発表された。フランス国内の民俗の展示を専門として 1972 年に開館した民芸民間伝承博物館（Musée des Arts et Traditions populaires：通称 A T P）を廃し、新たにヨーロッパ・地中海文明博物館（Musée des Civilisations de l'Europe et de la Méditerranée：通称 MUSEM）としてマルセイユで生まれ変わらせるという構想である<sup>2</sup>。既存の施設の再編成と言えばルーヴル美術館の大改修や国立図書館の新館新築等を行なったミッテラン大統領の大工事（grands travaux）が有名だが、シラク大統領の任期中にも引き続き文化施設の

補修と充実とに力が入れた。パリ市内および近郊だけでも、ユダヤ芸術・歴史美術館の開館（1998 年）、国立図書館リシュリユー館内に美術史研究所設立（2001 年）、前衛芸術を専門とするパレ・ド・トーキョーの再開館（2002 年）、パリ市北部郊外のピエールフィット＝シュル＝セヌへの国立古文書館の移転計画の発表（2004 年）、映画の博物館シネマテーク・フランセーズが再開地区ベルシーに移転（2005 年）、大規模展覧会施設グラン・パレの改修（2005 年に一旦終了、2008 年から再開）、パリ市南部郊外のヴィトリ＝シュル＝セヌにヴァル・ド・マルヌ現代美術館開館（2005 年）、オデオン座の再開館（2006 年）、チュイルリー公園内のオランジュリー美術館の改修終了（2006 年）、ルーヴル宮内にある装飾芸術美術館の改修（2006 年）、200 年の歴史を持つコンサートホールのサル・プレイエルの長期改修終了（2006 年）、そして人類博物館も入るシャイヨー宮の一部を改修して建築・遺産博物館を開館（2007 年）、これ以外にも見落とした事業があるかもしれない。こうした文化政策の中でも最大規模の金額が投じられたのが MQB の新設である。

同時代の博物館の試みについて研究するのはフランスでは一種の学問的伝統のようなもので珍しくないことである。だが MQB はただ最新であるという理由だけで注目されているのではなく、「民族誌的資料の蒐集史に決定的な転機を画した」「ひとつのページがめくられた」などと

<sup>2</sup> 人類博物館は「人類自然史博物館（Musée de l'Histoire naturelle de l'Homme）」に改修される見込だが 2008 年現在で開館時期等の詳細は未定（Dupaigne (2008)）。MAAO は 2003 年に閉館され、その建物は 2007 年に「移民史博物館（Cité nationale de l'histoire de l'immigration）」に衣替えされた。ATP は 2005 年に閉館した。MUSEM は 2008 年開館という当初の予定から遅れ、現時点では 2012 年の開館が見込まれている。なお本稿ではフランス語での慣用に従いながら、頻出する美術館・博物館名については略称で表記する。ただし人類博物館などフランス語でも略称で呼ばれることのない施設については、本稿でもあえて略すことは避け日本語の定訳を用いる。

評されるように<sup>3</sup>、さまざまな論点を提起する存在として重要視されている。開館から2年余りを経て、これまでに何度も学術誌で特集が組まれ、MQB に関する研究書がすでに数冊発表されているだけでなく、早くも博士論文の研究対象にさえなっている<sup>4</sup>。こうした状況を踏まえて、本稿では MQB に関する諸議論を紹介することを第一の目的とする。MQB の登場を機に学問と社会との関係のあり方が改めて問われており、その一連の議論には国の違いを越えて示唆に富む要素があると考えからである。よって日本の類似施設（国立民族学博物館）との単純な比較を狙っているのではない。フランスは博物館を観光資源として活用するのに成功している世界有数の国だということもあり、現代フランスにおける博物館の情勢は日本語でも紹介されている。しかしながら MQB はまだほとんど紹介がない<sup>5</sup>。この新しい施設がいかなる歴史を経て、いかなる使命を託され、いかなる試みを行なおうとしているのかを概観することに本稿を発表する価値がある。

<sup>3</sup> Coiffier (2008) p. 660, L'Estoire (2008) p. 665.

<sup>4</sup> 参照できた限り、以下の学術誌で MQB 特集が組まれている。*Le débat*, 108 (2000), 147 (2007), 148 (2008); *Ethnologie française*, 4 (2008). MQB に関する研究書としては、Dupaigne (2006), L'Estoire (2007A), Price (2007). MQB をテーマとした博士論文は社会科学高等研究院 (EHESS) に提出された Ventura (2006)があることを確認できたが、残念ながら未見である。なお筆者は EHESS に留学中 (2006-2008 年度)、MQB についてこれから博士論文を書く予定だという別の学生に会った経験がある。

<sup>5</sup> ミッテランの「大ルーヴル」計画等 1980~1990 年代におけるフランスの博物館政策については西野 (1995) に詳しい。ブノワ (2002) は訳者あとがきも参照。MQB については『芸術新潮』2007 年 3 月号に「パリのびっくり箱ケ・ブランリー美術館へ行こう!」と題した特集があるが、これは観光ガイド的に楽しむためのものである。

そのための手がかりとして『諸文化の対話—ケ・ブランリー美術館開館記念会議録 (2006 年 6 月 21 日)』を取り上げる<sup>6</sup>。本書には、アナン・国連事務総長 (当時)、レヴィ=ストロースらを迎えての開館記念セレモニーの翌日に館内のホールで行なわれたシンポジウムの記録が収められている。本稿が会議録の書評という変則的な形をとったのは、現在 MQB をめぐって展開されている議論を整理するという目的のためには、多種多様な意見が飛び交う会議録の性質がかえって適していると考えたためである。したがって以下では、会議録の発言を丁寧に整理することを重視していく。なお本会議録タイトルの『諸文化の対話』は「そこでは諸文化が対話する (Là où dialoguent les cultures)」という MQB のキャッチフレーズに由来する。そしてこのフレーズはシラク大統領の開館記念演説から採ったものである。世界のグローバル化に従って文化が画一化しつつある現代にあって、人類が各民族の文化の多様性を守り伝えていながら互いに手を取り合い、平和を実現するには、諸文化の対話を進めることが必要だと説く<sup>7</sup>。では、この会議録ではいかなる対話が試みられているのだろうか。またそこから見えてくる問題は何だろうか。

本稿ではまず MQB 設立の経緯を追いながら、

<sup>6</sup> *Le dialogue des cultures : Actes des rencontres inaugurales du Musée du quai Branly (21 juin 2006)*, sous la direction de Bruno Latour, Paris : Musée du quai Branly / Actes Sud, 2007.

<sup>7</sup> シラク大統領のこの演説の画像とテキスト、ならびに本書『諸文化の対話』に収められている会議の一部の画像を MQB のホームページで閲覧できる (フランス語のみ、2009 年 2 月 20 日現在)。  
<http://www.quaibrnly.fr/fr/actualites/actualites-par-rubriques/archives-des-actualites/index.html>

従来の民族誌博物館と比べて MQB にはどのような特徴があるのかを確認する。次にこの会議の論点を整理し分析することで、問題点を浮き彫りにする。最後に MQB の社会的役割と課題とを検討して稿を閉じる。

## 1 本書『諸文化の対話』について

本書の目次は以下に示す通りである。8つの円卓会議には便宜上番号をふり「章」と呼ぶ。カッコ〔 〕内に註を付した。

出合い〔原題は「会議」の意もある Les Rencontres〕ブリュノ・ラトゥール〔哲学、パリ政治学院教授〕

序言 ステファン・マルタン〔MQB 館長、会計検査院出身、元文化省官房長〕

開会の言葉 レオン・ベルトラン〔観光大臣（当時）〕

### 1 呼称の変容

司会：ジョン・マック〔美術史、英イースト・アングリア大学教授〕

### 2 近代芸術、伝統芸術、現代芸術？

司会：ジェルマン・ヴィアット〔MQB 館長付き顧問兼博物館学責任者、元 MAAO 館長〕

### 3 誰が物を所有するのか？

司会：クワメ・アンソニー・アピアー〔哲学、アフロアメリカン研究、米プリンストン大学教授〕

### 4 博物館—世俗的空間、儀式的空間、多目的空間？

司会：カトリーヌ・クレマン〔小説家、MQB 市民大学責任者〕

### 5 無形遺産の保存と伝承

司会：ダニエル・マクシマン〔作家〕

### 6 都市における博物館—いかなる記憶、いかなる市民のためのものか？

司会：サミュエル・シディベ〔マリ国立バマコ博物館館長〕

### 7 博物館—いかなる国際協力の一環となりうるのか？

司会：ジャンルー・ピヴァン〔ルヴュ・ノワール出版代表〕

### 8 物はいかに真正でありうるのか？

司会：ダニエル・ファープル〔人類学、パリ社会科学高等研究院教授〕

総括 司会：ブリュノ・ラトゥール

あとがき エドゥアール・グリッサン〔作家〕

午前中に8つのテーマの円卓会議が持たれ、午後は総括のための全体会が開かれた。別表（本稿末尾参照）に掲げた通り68人もの登壇者が招かれた。本会議録にはこの他にも、当日会場に足を運んだ数多くの参加者の発言も収録されている。ヨーロッパ、とくにフランスの研究者や博物館関係者が圧倒的多数を占めるが、アフリカやオセアニアなど展示されている文化の側からの参加者も少なくない。アジアからの参加者

が極端に少ないのは、日本や中国等東洋の美術品を専門とするギメ美術館 (Musée des Arts asiatiques-Guimet) との住み分けを図ったためかもしれないが、フランスの旧植民地をはじめとするアジア地域の展示は MQB でも充実していることを考えると不可解でもある。

会議の開会に先立って、館長のステファン・マルタンは次のように挨拶を述べた。「フランス人は傲慢だ、自分たちが全て発明し全て解決してきたような気でいる、などとしばしば耳にしますが、今日はみなさんに少々違う印象をもってもらったら幸いです。[...] この会議がコンフェランスでもシンポジウムでもなく、友人同士、同僚同士、同業者同士、良き仲間たち同士の話し合いのようなものとなるよう願っています」。そのような話し合いの中で、MQB に対する賛同の意だけでなく将来 MQB が直面することになるであろう諸問題への忠告も得て、今後の舵取りに役立てたいのだという<sup>8</sup>。MQB の運営者たちが開館に際してこうした機会を設けたのには、創設計画の発表以来、MQB が論争を招いてきたという背景がある<sup>9</sup>。諸論争の具体的な内容は以下で適宜述べていくが、円卓会議のために設定された8つの議題はそうした論争の主な争点に関わっている。開館を機にこれらの点について改めて話し合おうという主旨である。そ

の中で、総括の全体会でラトゥールも指摘するように最も関心を集めていたのが、民族誌的資料を美術作品と見なして取り扱うという MQB の方針である。まずこのテーマを扱う第1章「呼称の変容」から始まる<sup>10</sup>。ここで重要な鍵となるのが「アール・プルミエ (art premier)」という概念である。直訳すれば「原初芸術」「始原芸術」などとできるが、この語は頻繁に使われ始めてから日が浅く、まだ定訳はない。実質的にはプリミティブ・アートと同じものを指すが、「プリミティブ (primitif)」という語の進歩主義的・ヨーロッパ中心主義的な含意を忌避するために、代わりに「プルミエ」という形容詞を用いたことから生まれた言葉である<sup>11</sup>。

## 2 美術館と博物館との間で

MQB の最大の特色は斬新な展示方法にある。美術的な効果や雰囲気を出すために館内の照明を薄暗くしたり、ガラスケースの大きさや形や配置方法に工夫をこらすなど、全体的に現代美術のインスタレーションのような印象さえ醸し出している (写真3～7参照)。草案の段階から MQB で中心的役割を果たしてきたマルタン、

<sup>10</sup> pp. 369-371.

<sup>11</sup> 「アール・プルミエ (art premier)」の定義は、代表的なフランス語辞書『プチ・ロベール』の2007年新改訂版では「(プリミティブ [primitif] 「未開の」「原始的な」等と訳される)」という語を避けるために「産業化以前の文明、とくにアフリカ、コロンブスの『新大陸発見』以前のアメリカ大陸、および太平洋の文明の芸術」とされている。同じく『プチ・ロベール』によると、形容詞「プルミエ (premier)」は「第一の」「最初の」と時間的序列を意味するほかに、価値体系のヒエラルキーにおける最上級を指す意味もある。art premier という言葉においてはこちらの語感も無視できないため本稿では直訳を避け、当面の措置としてカタカナ表記を採用する。

<sup>8</sup> pp. 12-13. 以下、断りのない場合は本書『諸文化の対話』からの引用である。

<sup>9</sup> Schaeffer (2008) p. 171, Descola (2007) pp. 136-138 で、MQB をめぐる論争が簡潔に整理されている。

ヴィアットの両氏は過去にジョルジュ・ポンピドゥー芸術文化センター (Le Centre national d'art et de culture Georges Pompidou) の運営に関わった経験を持ち、ポンピドゥーセンターの現代美術に対する学際的なアプローチを意識しながら MQB を構想したと語っている<sup>12</sup>。実際、MQB ではベナン出身の彫刻家ロミュアル・アズメやナイジェリア系イギリス人インカ・ショニバルらの若手芸術家と共同して企画展を開くなど、現代美術との関係を重視している。かつて人類博物館で民族誌的資料と見なされていたコレクションが、MQB ではアール・ブルミエというカテゴリーの美術作品として定義しなおされ、新たに審美的な価値を与えられた上で展示される。したがって Musée du quai Branly という名称のフランス政府による正式な日本語訳は「ケ・ブランリー博物館」ではなく「ケ・ブランリー美術館」である。

アール・ブルミエに特化した美術館が建設されるに至った背景としてはシラク大統領の個人的な嗜好が大いに作用したのだが、決定的だったのは彼と美術商ジャック・ケルシャッシュ (1942～2001) との出会いだった。ケルシャッシュはかねてよりフランスの美術館におけるアール・ブルミエの地位向上を願っていた。1992年にシラク氏 (当時パリ市長) と出会ったのを機に、彼は悲願を実現させる糸口をつかむ。かつてアポリネールが提案したように、ルーヴル美

術館という世界の美の殿堂にアール・ブルミエを展示するということはケルシャッシュにとって象徴的な意味を持っていた。これが実現したのは2000年、MQBの開館に先んじてルーヴル美術館の中にセッション館 (Pavillon des Sessions) というアール・ブルミエ専門の展示館が MQB の支部として設けられた時のことである。その後ケルシャッシュは MQB の落成を待たずにこの世を去った<sup>13</sup>。

一方、美術館として存在しようとする MQB の方針は、これまでの民族誌博物館への反省を踏まえてのものでもある。MQB の前身の一つである人類博物館や2005年に閉館された ATP では、博物館付属の研究所に所属する民族学者が研究のみならず博物館運営の中核も担い、学術的に優れた質を誇っていた。いずれの博物館も1930年代に立ち上げられたもので、フランス現代博物館学の祖ジョルジュ＝アンリ・リヴィエール (1897～1985) の影響が色濃い。リヴィエールの提唱する「環境型展示」のコンセプトのもと、ジオラマや人形を使いながら、物が実際に使われていた状況を再現する形で展示されていた<sup>14</sup>。しかし1990年代には徐々に客足が遠のき、採算面の問題が深刻化していく。ATP では開館以来、一度も常設展に手を入れたことが

<sup>13</sup> シラクとケルシャッシュとの友好関係および MQB 設立の経緯については、Price (2007) pp. 1-66, Dupaigne (2006), Viatte (2000) pp. 78-79, Viatte (2007), Martin (2007) pp. 5-6, 20-21.

<sup>14</sup> Chiva (1985). フランスの民族学ならびに博物館の歴史に関して日本語で読める文献としてはキューズニエ、マルタン (1991) が優れている。

<sup>12</sup> Martin (2007) p. 8, Viatte (2000) pp. 76-77.

なかった。人類博物館でも同様で、展示を改善しようにも資金不足でかなわず、代わり映えない展示のせいで観客はますます離れていくといった悪循環に陥り、立ち行かなくなってしまう<sup>15</sup>。研究者主導の学術志向の展示では客を呼び込めない時代になってきていた。これに対しMQBでは、民族学者の影響力が相対的に縮小している。3つの研究所を設置する人類博物館と異なりMQBでは付属の民族学研究所を持たないため、民族学者の関わり方は期間も役割も限定されている。例えば展示企画への協力のため数年間だけMQBに所属する、子ども向けのアトリエ等の催し物に協力する、あるいは市民大学のシンポジウムに参加するという具合で援助者としての位置づけにとどまる。かわって施設の運営が任されるのは、学芸員ら博物館学の専門家たちである<sup>16</sup>。民族誌的資料を美術品と見なし、美術的観点を重視しながら展示室を演出するという方針の意図は、MQB研究・教育局長のアンヌ＝クリスチヌ・タイローによれば、来館者が展示品の美しさに感嘆することをきっかけにその物を生み出した文化に興味を持つようしむけることにある。つまり美術志向の展示方法は、来館者の知識欲をそそるための「誘惑」あるいは「入口」なのだという。作品の

美しさを際立たせるような展示は、民族誌博物館の役目を効果的に果たすことにもつながる。こうした考え方は元々ケルシャッシュが主張していたものであり、MQB設立の原動力となった彼の思想は現在もなおMQBの博物館学に受け継がれていることが分かる<sup>17</sup>。開館初年度の来館者は事前の予想では年間80万から120万人程度を見込んでいたが、それを上回る約170万人という快調な滑り出しを見せている<sup>18</sup>。商業的には成功と見てよいだろう。

一方このケルシャッシュの主張に基づく方針に対し、民族学と博物館との「離婚」だと危機感が表明されている。人類博物館民族学研究所長のデュペーニュは、MQBの計画と利害が直接対立する立場にあってケルシャッシュからやり玉にあげられていたこともあり、個人的な感情を吐露しつつも、MQBの設立までの経緯を綿密な資料調査に基づきながら検討して次のように批判している。ケルシャッシュは美術商として自らの市場開拓のために民族誌博物館から文化財を取り上げた。アール・ブルミエという言葉を広めたのは他ならぬケルシャッシュである。ケルシャッシュの主張では、民族学者には美的価値など分からない、物はもとの文脈から抜け出させて初めて美しさを獲得する、したがってもはや民族学的知識など不要だという。このためMQBの準備段階では、一切の民

<sup>15</sup> Guibal (1992), Descola (2007) p.136-143, Dupaigne et Gutwirth (2008) p. 628. ただしMAAOは、徐々に経営状態が改善されてきていた矢先の閉館決定だった。Monjaret, Roustan, et Eidelman (2005) p. 607.

<sup>16</sup> フランスでは1990～1991年に学芸員制度改革が行われた。日本の学芸員とは職務・権限に大きな違いがある。フランスの学芸員は文化財保存に関して高度に学術的・行政的専門知識を有し、多くは研究者でもある。西野 (1995) pp.14-34.

<sup>17</sup> Taylor (2007) pp. 680-682, Price (2008) pp. 190-191.

<sup>18</sup> Martin (2007) p. 12.

族学者の関与が認められなかった。しかしデュペーニュは、物を製作した社会に関する知識のない人々が文化財を管理することに反対し、研究施設でもあるはずの博物館から研究者が追い出されつつある現状に異を唱える<sup>19</sup>。また、都市工学・建築学者のショエイはMQBを「異文化趣味のディズニーランド」と挑発的に呼び批判する。シラク大統領からMQBの草案を任された小委員会はいずれも国立行政学院 (École nationale d'administration: 高級官僚を養成するグラランドゼコール) 出身の官僚や経済界の大口で、不必要なほど巨大な施設が学術的無理解の下に作られ、また学芸員制度改革の結果、学芸員が自律性を失い官僚の介入を助長させているとして、MQBにおける学術的専門性の低下を危ぶんでいる<sup>20</sup>。

翻って本書の円卓会議を見ると、驚くことにこうした批判が見当たらない。MQBにおける美術と民族学との関係を論じる第1章「呼称の変容」で、運営委員会が提示した議題は以下の通りである。「美術作品と民族誌的資料という古典的な二項対立に始まって、この討論では主にMQBの展示物の来歴に潜むプロセスについて論じる。このプロセスは、MQBとそのコレクションとを今後豊かにさせるにあたっていくかなる影響をもたらすのか。[...] そして蒐集の実

践にいかなる作用を及ぼすのか」<sup>21</sup>。この問いへの返答は会場ではほぼ一致する。要約すると、旧来の二項対立にはもはや意味がない。なぜなら同じ「もの」でも展示の文脈によってどちらにも解釈でき、一つの物を一義的に区別するのは不可能だからである。MQBが本当に必要としているのは物をどう呼ぶかを議論することではなく、同じ物でも状況の変化に応じて機能の仕方や呼ばれ方も変化していくのだから、そうした「もの」をとりまく諸関係や来歴を効果的に展示に反映させていく方法を問うことである。見解が一致したことが確認されると、会場の関心は議題から離れ、展示方法の工夫等の実践例の報告と意見交換が続く。観客にどの程度詳細な情報を与えるべきかという点に関して多少の議論はあったが<sup>22</sup>、民族学と美術と博物館との関係については論争らしい論争がないままこのセッションは終わる。

MQBの誕生を受けて博物館学上の「呼称の変容」を問う議論がやむことなく続けられている状況を考慮すると、この議題にして論争が生じないのはいかにも不自然である。そこでもう一度議題に目を向けると、ここで問うているのはデュペーニュらが批判する博物館学上の「呼称の変容」ではなく、「もの」の来歴における「呼

<sup>19</sup> 「離婚」という言葉はDupaigne et Gutwirth (2008) p. 627から。Dupaigne (2006)。

<sup>20</sup> Choay (2007)。『フランス民族学』誌 (*Ethnologie française*) 2008年4号でもMQBおよびMUCEMを中心として民族学と博物館との関係を再考する特集を組んでいる。Segalen (2008)。

<sup>21</sup> pp. 21-22。この議題に関して司会のジョン・マックは民博と世田谷美術館との共同企画に言及している。吉田、マック編 (1997) を参照。

<sup>22</sup> pp. 32-46 (Geneviève Calame-Griaule, Hélène Leloup, Maurice Godelier, Violeta Ekpo, John Mack, Jean-Aimé Rakotoarisoa, Jean-Paul Colleyn)。以下、本書討論からの引用については発言者名をカッコに入れて記す。



称の変容」という言葉上・分類上の問題である。一見して MQB をめぐる最大の論争を想起させる議題を掲げているにもかかわらず、内実は論点が異なっている。MQB の方針に対する批判が会議の場で噴出しにくいようにと巧妙に争点をずらしながら議題を設定したのだろうか。この章では、MQB が民族誌博物館でもあり美術館でもあるという新しいタイプの施設として誕生したことが示され、そうした両面性ゆえの特性についても効果的に演出されている。そのような新しいタイプの施設だからこそ可能なこととは何だろうか。期待されている役割とは何だろうか。またそこにはどのような課題があるだろうか。

### 3 「その橋を渡るために」

MQB が美術館と博物館という二つの性質を備えていることに呼応して、本書の議題にも大きく分けて性質の異なる二つの傾向を認められる。「呼称の変容」および「近代芸術、伝統芸術、現代芸術？」では、第1章で MQB の収蔵品の性格を定義し、第2章でそれらと現代芸術との接点や影響関係の可能性について論じるなど、アール・ブルミエの美術作品を専門に扱う美術館としての顔が前面に出されている。が、続く第3章「誰が物を所有するのか？」から第7章「博物館—いかなる国際協力の一環となりうるのか？」にかけてはむしろ、人類の遺産を保管する施設としての MQB に課せられた使命を問

うような設題が続く。これらの章の表題を「博物館」と訳し分けたのはそのためである。名称やコンセプトとしては美術館の側面を強調しているのに、開館記念会議に用意された議題の大半は博物館としての命運に関わるものである。本書がこのような構成をとるのは、従来の博物館に対する反省をきわめて意識的に行ないながら、これまでになかったことを MQB で実現させようという姿勢の現れではないだろうか。以下、それぞれのセッションでの議題および議論の内容をまずは簡単に振り返り、それをもとに MQB に期待されている役割を整理し、課題の所在を明らかにしていく。

第3章「誰が物を所有するのか？」は、MQB には植民地からの収奪品が少なからず収められているため設けられた議題である。旧植民地からの返還請求はこれまでに世界各地で起こってきた。MQB で収蔵する物 (objet) はもともとその文化に帰属している物を MQB が預かっているという状態なのか、それとも MQB の所有物なのか。MQB のコレクションの正統性を語る議論となる<sup>23</sup>。ここでの発言者の多くはオセアニア、アフリカ、ラテンアメリカといった「非西洋」地域の博物館の館長である。現在 MQB で所蔵する文化財は、それを生み出した共同体にとっては今なお重要な意味をもつ文化資本 (ressources culturelles) であるから、そのような共同体に住む人々も祖先の作った物を目にする

<sup>23</sup> pp. 97-98 (Appiah), Appiah (2008).

機会を得られるような方法を考え出すことが必要だとして<sup>24</sup>、このセッションではMQBと物を製作した地とで所蔵品を共有するための道が模索される。MQBではインターネット上での所蔵品の公開を積極的に進めており、一部では立体的な画像を画面上で自由に動かしながら鑑賞できるようにもなっている。非常に有力なツールのように思われるインターネットだが、物の製作地側からは反対意見があいつぐ。インターネットへの接続環境がないことが多いためである。全人類共通の知をインターネットで築こうという考え方は、一部のエリートつまり先進国だけのものに過ぎないと蹴される<sup>25</sup>。そこで実際に収蔵品を巡回させるのも一計だが、コストに見合う採算が見込めないばかりか、輸送中に文化財が破損してしまう危険性もあることからあまり現実的とは言えない<sup>26</sup>。

当然ながら製作地側としては自分たちの文化財がMQBに「所有」されることは必ずしもよしとしない。非西洋文化には「所有」という西洋的概念そのものが元々存在しておらず、「ポリネシアでは最初の植民者たちがヨーロッパから到着する時までは物の所有権という問題は起こりもしなかった」ため、自分たちの祖先が製作した物をよそ者が「所有」することへの抵抗は

根強い。そもそも「所有」という概念を用いて議論すること自体、自分たちは出発点からして不利な状況に置かれているのだと「非西洋」側は厳しく指摘すると同時に、「非西洋」人は自分たちが西洋的観念の「囚人」と化していることに気づくべきだと訴える<sup>27</sup>。非西洋文化の人間が、同じ立場にある人間に対してMQBの言説を打ち破っていかうと呼びかけているのである。非西洋文化を虜としているのは、「所有」という法的概念だけではない。博物館という器もまた、多くの非西洋地域においては西洋の侵略の遺構である。文化財を保護するという目的のために、博物館制度が本当に自分たちの国の政治的・経済的・社会的状況に合致しているのかと改めて見直す動きも出始めている。

それでも製作地側は収蔵品の返還をあえて求めようとしない。アフリカを例にとると、多くの博物館では予算不足やそれに起因する人員不足という問題を抱えているため、文化財を適切に保管しうるだけの環境を整備し、それを維持するのは困難である。それに加え、外貨を得る手段として文化財の売買が横行しており散逸の危険性もある。したがって製作地側としては、自分たちの文化財をより良好な状態で保存したいのであれば、先進国で「所有」されることのメリットを認めざるをえないのが現状なのである。例えばそのような状況にあるカメルーンの

<sup>24</sup> p. 108 (Ralph Regenvanu ヴェヌアツ文化センター館長)。

<sup>25</sup> pp. 118-120 (Regenvanu, Manuela Carneiro da Cunha サンパウロ大学教授)。

<sup>26</sup> pp. 103-106 (Alicandra Cummins, Cunha), pp. 126-131 (Steven Engelsman オランダ国立ライデン民俗学博物館館長, Thomas Webster パプアニューギニア出身, John Freide 収集家)。

<sup>27</sup> pp. 120-124 (Jean-Marc Pambrun フランス領ポリネシア出身、タヒチ博物館館長), pp. 129-130 (Webster)。

博物館では、自国の文化財を収蔵するスイスの博物館との間で緊密な連携をとることを始めた<sup>28</sup>。現実には物自体は先進国(多くの場合旧宗主国)に存在しているとしても、精神的な面では製作された土地に帰属し続け、その土地に住む人々と物とのきずなは決して切れるものではないのだという認識に支えられて「非西洋」の側は現状を受け入れようとしている。MQB には、カメルーンとスイスの事例のように所蔵品の製作地との協力関係を密にすること、そして物と製作地の共同体との精神的なきずなを尊重しうまく結びつけていくことがこれからの課題として求められている<sup>29</sup>。

物の所有に続いては、その物をどう展示するかが論じられる。MQB には神聖な力を有する多くの物がある。これらを展示するにあたって、ライシテ(非宗教性)を掲げるフランスの博物館としてはその宗教性をどう扱ったらよいのか。この問題を取り上げた第4章「博物館—世俗的空間、儀式的空間、多目的空間?」では、「オセアニアグループ」と「非信者グループ」とに分かれ激しい論争が起こった<sup>30</sup>。前者は、物におのずから備わる神聖さを博物館や民族学者は尊重すべきだというオセアニア出身者たちの意見

である。例えばヴァヌアツ国立博物館がスイスで行なった巡回展では、地元での展覧会と同じように女人禁制の禁忌を遵守するための工夫をした。さもなければその物の持つ力によって女性是不妊になってしまうからである。「MQB が同じことをすべきだと言いたいわけではありません...。これはただ、南太平洋の島々という奥地から発せられる叫びなんです。そこではたいへん奥深いことが存在しているということ、そしてそういうことについて熟慮すべきだということと言いたいだけなんです」<sup>31</sup>。これに対しフランスの民族学者たちは「非信者グループ」の立場をとり、尊重すべきは物自体という壊れうる存在ではなく、その物を作った人々や、日々の暮らしの中でその物に意味を見いだしている人々なのだから、物を崇めるあまりに博物館が信仰の場と化すのを許すべきでないと主張する。彼らの多くは MQB に直接関係している。司会者が後者の立場を全面的に支持したこともあり、この論争は「非信者」陣営が「オセアニア」をやりこめるような結果になった。ここでの争点は表面的には博物館における宗教性の解釈にあるが、後述するようにそれ以上に深い問題も含んでいる。

さてここまでは手に取ることのできる物について論じられてきたが、第5章「無形遺産の保存と伝承」では、音楽・演劇・儀礼等の無形遺産の保全のために今日の博物館として MQB が

<sup>28</sup> p. 128 (Lorenz Homberger チューリッヒのリートベルグ博物館), p. 132-133 (Oumarou Ncharé カメルーン王立フォウンバン博物館館長), p. 134 (Loma Abungu ナイロビの Africom 議長).

<sup>29</sup> pp. 135-136 (Donatien Muya Wa Bitanko コンゴ民主共和国国立ルブンバン博物館館長).

<sup>30</sup> pp. 378-379. 司会者のクレマンが、二陣営のグループに分ける形で論戦を整理した。クレマンが「非信者グループ」と呼んだのは、「私達は信者ではない」だからその宗教の規範に従う必要はないとのジュディ=バリーニの発言に因む。

<sup>31</sup> p. 381 (Kirk Huffman ヴァヌアツ国立博物館名誉学芸員).

どうあるべきかが問われ「このアトリエでは、MQB のような施設において定着可能な、または定着を必要とする無形遺産を救うという MQB の使命を問う」議題が課される<sup>32</sup>。伝統的な知恵や知識、職人の技術まで含めたユネスコ無形遺産の協定が 2003 年に締結され、2008 年 11 月からは登録も始まった。世界遺産はこれまで建造物や場所等の有形遺産に偏っていたが、現在その状況に変化が起きつつある<sup>33</sup>。MQB では、無形遺産保護の取り組みとして特に民族音楽の展示に力を入れている。その一例は楽器の収蔵庫である。館内の中央部に巨大なガラスでできた円筒形の柱を設けてその内部に楽器収蔵庫を設置することで、観客が一種の「展示」として眺められるようにするという珍しい試みを行なっている。観客は円筒のぐるりに設置された小さな画面で収蔵庫にある楽器（日本の箏やモンゴルの馬頭琴等）が演奏される様子をいつでも視聴することもできる。ほかに展示室内の小部屋や映画室で映像が上映されるだけでなく、館内劇場では音楽プログラムの興行も行なわれる<sup>34</sup>。無形遺産が政治的圧力に脅かされたり観光化のせいで変質してしまったりすることなく、真正な形で本質を守りながら後世に伝えていけるように MQB が援助の手を差し伸べるよう望

む声がある一方で<sup>35</sup>、「非西洋文化」から見ればそもそも有形と無形という区別を設けること自体がおかしいとの辛辣な指摘もあがる。すべての物には生命が宿るという考え方からすると、物質的な遺産と形のない精神的な遺産とを分けて別個のものと見なすのは納得できないのである<sup>36</sup>。

第3章で出たインターネットの例のように、単純に非西洋の現状への無理解が原因となって反発を招いた場合もある。しかしそれ以上に、第4章での博物館の展示における禁忌の遵守に関する問題、あるいは今見た無形遺産の件のように、非西洋文化と西洋文化とでは考え方の違いが存在するということを非西洋文化を代表する参加者たちがあえてこの場で指摘せざるを得ないのは、少なくともこの会議ではその認識がなおざりにされていると彼らが感じ取っていたからである。この点は MQB にとっては一考に値する。というのも非西洋文化という「他者」との対話を掲げて開館したにもかかわらず、その対話の礎たるべき理解および文化的平等がなっていないと、当の「非西洋文化」から突き返されているからである。これを虐げられてきた者たちからの単なる反発としてだけ受け取るべきではない。「この討論にはあまりに多くの声が

<sup>32</sup> pp. 178-179 (Maximin).

<sup>33</sup> pp. 219-221 (Laurent Lévi-Strauss ユネスコ文化遺産事務局長補佐)。松浦 (2008) は一般書ながらこの変革の経緯を当事者の立場で詳述していて興味深い。

<sup>34</sup> pp. 198-200 (Madeleine Leclair MQB の音楽担当者。ペナン研究の専門家)。

<sup>35</sup> p. 226 (Vinesh Hookoomsing モーリシャス出身)。

<sup>36</sup> pp. 170-171 (Manolo Osorio パリ第3大学教授、ペルー出身)。フランスに長く住んでいるが、ペルー的な「物は生きている」という見方は今も自分の中に生きている。だから西洋では物がなによりもまず美術品と見られてしまうのが少し悲しいとも述べる。p. 229 (Amalia Chaverri Fonseca コスタリカ副首相)。

欠けています。この討論は [...] きわめてフランス語圏的で、きわめてフランス的な精神構造に基づいています。そういう風にはちっとも考えず、そうした精神構造を持たない多くの者の声を欠いているのです。[...] あなたがたに足りない声は、あなたがたが今話題にしているあらゆる物 [MQB の収藏品] をあなたがたに与えた者たちの声です。[...] あなたがたは、有形と無形、肉体を持つものと持たないもの、織物と音楽、話し言葉と書き言葉といった具合に物事を切り離してきた精神のなりたちをどのようにして打ち壊していくつもりですか? [...] 美術のための美術というのは原住民の概念ではありません。あらゆる物には機能があるのです。[...] この橋を渡るために何をしようとしていますか?そしてこの博物館が他者の思想を反映できるようにするために、あなたがたは何をしようとしていますか?北と南、南と南で異なる住民どうしの対話を促すために何をしようとしているのでしょうか?」<sup>37</sup>。MQB が「非西洋」と対話するにはフランス的精神から脱却する必要があるのに、その準備ができていないではないかと迫っているのである。

物を生み出した共同体の意見が優先されるべきか否かという問題は、倫理的な側面のほかに社会的文脈によっては政治的意味をも帯びるも

のである。アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどの博物館で、原住民の共同体と近接しながら彼らの文化を展示している場合、彼らの文化なのだから彼らの声を聞かなくてはならないという姿勢を政治的な配慮ゆえにとることが多い<sup>38</sup>。これに対し第4章で「非信者グループ」と名付けられたフランスの民族学者らは、非西洋的な観念に従ってはいは貴重な文化財がみすみす破壊される恐れがあるばかりか、研究が妨げられる可能性もあるとして断固拒否する。「他者や物に対する敬意の念は、宗教的記号を信奉することにはつながらないと思っています。博物館という概念は西洋的概念であってメラネシアの概念ではありません。アフリカ的な概念かどうかは分かりませんがそうではないと思います。これらの物には芸術的意味が込められていないし、美的な意味もない。しかしだからと言ってこれらの宗教的な物に美的な意味を見るのを禁じるのですか?」<sup>39</sup>。MQB 館長も同様に、物を作り出した文化の信仰に従う形で展示には反対する<sup>40</sup>。もちろん原住民との共存型の博物館と MQB とでは社会的文脈が異なるわけだから、同じ態度に与する必要は全くない。とりわけ宗教的な側面に関してはフランスにおいて「非信者グループ」の主張はもっとも

<sup>37</sup> pp. 227-229 (Eliane Karp de Toledo ベルギー育ちのユダヤ人人類学者。ペルーのトレド大統領(当時)夫人)。円卓会議での使用言語が英語とフランス語のみに限られていることを批判しての文脈。

<sup>38</sup> 次に見る第6章で、原住民と博物館との関係は改めて取り上げられる。

<sup>39</sup> p. 171 (Monique Jeudy-Ballini メラネシア研究を専門とする民族学者)。

<sup>40</sup> 館長は、博物館には原住民との共存型のものと、人類博物館のような学術志向のものと2種類があるが、MQB はそのいずれでもない道を探るとしている。Martin (2007) pp. 10-12.

である。しかしこの会議で山のように出てきた非西洋文化の側からの異議申し立てを、己を省みる鏡として役立てる道はないものだろうか。西洋文化への批判の声に耳を傾け、MQB における「他者」の文化の扱い方を再考することこそが、冒頭で館長が述べたようなこの会議の目的であると同時に、対話を行なう意義でもあるはずである。ところがこの会議の場では少なくとも記録を読む限り、こうした非西洋文化の声は第4章で見られたように圧殺されるか聞き流されてしまっている。

では、MQB だからこそ可能な諸文化の対話のあり方とはいかなるものか。人類博物館のような従来の民族誌博物館にはない可能性を MQB はいかに示すのか。そのためにはいかなる課題があるだろうか。以下 MQB と社会との関わりという視点から考察する。

#### 4 ケ・ブランリーの使命と課題

見てきたように、本書第3章から第5章までは博物館の展示方法や運営方法に関連するテーマが続いた。ここまでが二つ目の大きなまとまりと見なせる。次は MQB の社会的機能へと論点が移る。第6章「都市における博物館—いかなる記憶、いかなる市民のためのものか？」第7章「博物館—いかなる国際協力の一環となりうるか？」では、MQB がパリという都市あるいは世界の中でどのような役割を果たしていくべきか、そしていかなる形で諸文化の対話の場

となれるのかが討議される<sup>41</sup>。

博物館で展示されている文化の担い手たちがその博物館のそばで暮らしていても、その人々の足を博物館に導くのは難しい。第6章ではこのジレンマを克服するために世界各地で行なわれてきた試行錯誤の例が報告され、それらを比較しながら、多くの移民の住む街に建つ博物館としての MQB の社会的役割について論じている<sup>42</sup>。実際、所蔵品の文化をルーツとする人々を観客として迎えるにあたってどのようにしたら彼らの期待に答えられるのかが長らく懸案事項だったと MQB 館長は語る<sup>43</sup>。移民の住むヨーロッパの大都市であるという点でパリと共通するミュンヘンの民族学博物館では、博物館が文盲のアフリカ移民の女性たちにドイツ語を教えるなどして移民の同化政策に寄与している<sup>44</sup>。一方ロンドンのピット＝リヴァース博物館と大英博物館では、所蔵品を製作した場所の出身の移民たちを定期的に招待し、彼らと民族学者とが収蔵品を囲んでワークショップや食事会を行なって交流しながら、移民たちが自らのルーツの文化の価値を再認識できるような機会を設ける試みを行なっている。元来博物館とはお金と教養の

<sup>41</sup> pp. 233-234 (Samuel Sidibé マリ国立バマコ博物館館長)。

<sup>42</sup> Anne-Marie Boutiaux (民族学者。ベルギーのテルヴェーレン王立中央アフリカ博物館所属) はベルギーに住むコンゴ人ディアスポラと共同作業で展覧会を行なった博物館の例 (pp. 234-236)、James Clifford はアメリカのオークランドの博物館で原住民の伝統的行事に合わせて博物館を解放してきたという例 (pp. 240-241)、Judith Ryan (メルボルンのヴィクトリア州国立美術館学芸員、アボリジニ芸術の研究者) はアボリジニと博物館との関係をそれぞれ報告している (pp. 247-248)。

<sup>43</sup> pp. 258-260 (Martin)。

<sup>44</sup> pp. 242-243 (Claus Müller 国立ミュンヘン民族博物館館長)。

ある階層のためだけのものだったが、民族誌博物館ならばこうした取り組みを経て移民との対話の場になれると故メアリー・ダグラスは期待を込めて報告した<sup>45</sup>。MQB の行き先はまだ不透明である。フランスでは、自国フランスでも親の出身地でも自分の居場所を見つけられずに苦しむ移民の子どもたちや若者が大勢いる。会場の発言は、こうした子どもたちへの教育にMQB が力を入れることを何よりも望んでいる。

かわって第7章では所蔵品を生み出した地とMQB との関係が問われ、とくにアフリカの博物館の窮状が中心的に取り上げられる。大博物館の建設が進むベナンやブルキナファソのような例はあるものの、役人のリストラが進む中それを維持できるだけの人材を確保しきれないという問題に直面している<sup>46</sup>。それに加え、アフリカでは一般的に国からの文化に対する支援が少なく恒常的に運営に苦勞している<sup>47</sup>。文化財が豊富に存在し、共同体や個人の運営する小規模な博物館の中には優れたものも多いのに、研究機関としては機能できていないのが現状である。こうした人的・経済的困難を開解する策として、アフリカとヨーロッパの研究者間の交流、共同研究の実施、人材育成のための提携、あるいは国や企業からの助成金を得る方法等の運営

に関するノウハウを交換する形で、博物館どうしが協力することが必要である。実際MQBでは、すでに49ものアフリカの施設と双方向の協力関係を締結していることが報告される。国際的な博物館間の提携ネットワークの核として機能することこそが、MQBの所蔵品を製作した国々に対して果たしうる役割だという見解である<sup>48</sup>。

これら二つの章で分かる通り、この会議では殊にアフリカとの関係が偏重されている。広く「非西洋文化」を掲げながらも、MQBが主に念頭に置くのはアフリカとの対話であり、アフリカとの協力関係を築くことなのである。アフリカからの移民の増加によってフランス社会では「われわれ」と「彼ら」との境界が曖昧になってきているという認識がその根拠である<sup>49</sup>。これは社会の変化であると同時に、民族学・人類学における変化でもある。「他者をわれわれとは別個の存在として語らないようにするため [...] 他者をわれわれの一部をなす存在として、そしてわれわれも他者の一部をなす存在として考える」というMUCEMのコンセプトと同じことが、MQBでも求められている<sup>50</sup>。こうした認識に対応した施設として、MQBやMUCEMが待望されたのである。

たしかに旧来の学術志向の博物館では、社会

<sup>45</sup> pp. 148-149, 383 (Mary Douglas). 彼女の発言は第6章のセッションではなく、第4章及び全体会に掲載されている。

<sup>46</sup> pp. 272-273 (Alain Godonou). ベナンのポルトノヴォにあるアフリカ遺産研究院学長。

<sup>47</sup> pp. 312-313 (Souleymane Cissé 映像作家), p. 317 (Olivier Poivre d'Arvor).

<sup>48</sup> pp. 281-299 (Godonou, Michel Colardelle 元 ATP 館長、現 MUCEM 館長, Pivin, Jean-Marc Poinsoy フランス国立美術史研究所研究科長, Henri Loyrette ルーヴル美術館館長).

<sup>49</sup> p. 183 (Maximin).

<sup>50</sup> 引用は p. 277 の Colardelle の発言から。

の変化や最新の民族学・人類学の知見に対応しきれなくなっていた。人類博物館も ATP も設立は 1937 年、人民戦線内閣の時代である。リヴィエールとともに設立に尽力したポール・リヴェは、人類博物館を人類の全記録を収める「植民地プロパガンダ」の場とすることをめざした<sup>51</sup>。ここでの文化的多様性の研究は植民地政策に捧ぐものであった。ATP でも同様に文化的多様性の研究が行なわれたが、こちらはフランス農村地帯の激変に伴い消滅が危惧されていた伝統的な習俗に特化しており、のちのヴィシー政権下の「土への回帰」にも通じる政治的意図もあった<sup>52</sup>。長年 ATP に携わってきた民族学者マルティヌ・セガレンは、それまで蔑まれ虐げられてきた文化に正統性を与える役割を ATP は果たしていたと振り返る。1970 年代に ATP の展示が多くの支持を受けたのは、誰もがそこにかつての自分の暮らしを見たからである。「ですからそこには浸透作用とまではいかなくとも、少なくとも再認の作用はあったのです。それから一世代もの時間が過ぎて、ATP が入館者を失った理由の一つは、もはや皆が自分たちの姿をそこに認めなくなったということなのです。そして今や議論の争点は移民文化にあります。もう長いこと私達のところにいる新たなフランス人たちが、彼ら自身の姿をそこに認めるのかどう

か知りたくてそのような議論をするのです」<sup>53</sup>。今フランス社会の中に正統性をもって位置づけられるべきは移民たちの文化であり、この仕事を請け負うことこそが MQB に課せられた使命である。

では MQB では、移民たちや旧植民地とフランスとの関係をどのように展示するのか。第 1 回大企画展「他者へのまなざし (D'un regard l'Autre)」では、中世から 20 世紀に至るまでに西洋が集めた非西洋文化に関する物や写真の展示を通して、非西洋文化に対し注がれ続けてきた西洋のまなざしの歴史を辿ってみせた。展示品を通して西洋における非西洋の表象の歴史を描き出したその展示室には、文字情報がきわめて少なかった。最大限の情報を解説にもりこんだ人類博物館のやり方とは逆に、展示に用いるあらゆる装置を動員し、展示室の空間全体で物と物とを結ぶ文脈を浮き彫りにするような演出がなされていた。試験管の形をしたガラスケースに入れられたアフリカの仮面、見る人に向かって切っ先を突きつける槍の束。文章によらず物の見せ方という間接的な方法によって文脈を可視化し、あとは見る人の解釈に委ねようというスタンスである<sup>54</sup>。

これに対し、MQB における「他者」の位置づけについて考察したブノワ・ド・レストワールは、このテーマがまなざしの作用のみにとど

<sup>51</sup> Dias (2007) pp. 68-77. 人類博物館の前身であるトロカデロ民族誌博物館を中心としたフランスの博物館の歴史に関しては Dias (1991)、植民地支配と民族学との関係については竹沢 (2001) を参照。

<sup>52</sup> Chiva (1985) p. 79.

<sup>53</sup> pp. 248-250 (Martine Segalen パリ第 10 大学ナンテール校民族学・社会学教授)。

<sup>54</sup> この展覧会のカタログは Le Fur (dir.) (2006)。



まって扱われたことを批判する。表象の観点からこの問題にアプローチした MQB に対してレストワールが比較するのは、2002 年にイギリスで新設されたブリストル大英帝国およびコモンウェルス私立博物館 (British Empire and Commonwealth Museum of Bristol) のケースである。ブリストルの博物館の目標は、万人に「共有された歴史」を見せることにある。常設展では 18 世紀に三角貿易の主要な港として機能したブリストルの地域史を中心に据えながら、流刑民、原住民、宣教師、植民者、帝国の兵士等さまざまな立場から見た植民地支配の経験の証言 (声またはテキスト) を一堂に展示する。さらに紅茶の消費等のイギリスの生活様式が帝国の影響を大きく受けて成立したものだということを示し、過去と現在との連続性を強調する。この博物館の試みによって、共有された歴史のあり方を展示室で演出することが可能だと証明されたレストワールは評価し、MQB でも近い将来このような方向性が考慮に入れられることを期待する。彼の論点は、植民地支配の過去への反省こそが存在理由であるにも関わらず、MQB ではブリストルの博物館のように確固たるメッセージを発信しないまま暗黙の了解に委ねていることへの批判にある<sup>55</sup>。しかし MQB 館長は、MQB の使命は政治的社会的施設として社会の期待に応えていくことにあると断言す

る<sup>56</sup>。レストワールが言うような明確な歴史像を提示するのではなく、展示工学を駆使して漠然とイメージを表象するというのにも限らない、何か別のところに MQB からの明白なメッセージがあるのではないだろうか。

そこでもう一度 MQB の特徴を振り返ってみると、前節でも言及した通り、宗教的な力を宿す所蔵品に対して MQB ではその物を生み出した文化における崇拝や禁忌に従うことを断固拒否し、あくまで学術的に取り扱う。かわりに、その物の発するパワーや神秘的なオーラを高めるような演出を行なうことを重視する。物の美しさと権力や神聖な力とは密接に結びついている。その物は元々の文化では美しさゆえに人々の崇拝の念をかきたててきた。MQB では、こうした美しさに感動する気持ちを観客にも迫体験させることで、物を生み出した人々の敬虔な心情やその物に接する態度を彷彿とさせるのだという<sup>57</sup>。美術的効果を重視するという、本稿の冒頭でも言及した MQB の方針は、ただアール・ブルミエという範疇に属する美術作品としての価値に光を当てるという目的だけではなく、物を生み出した文化の人々の感情を来館者にも体験させることで、元々の文化におけるその物の受容の本質を伝えることを可能にする展示方法なのだとフィリップ・デコラは指摘する<sup>58</sup>。つまり、展示品の美しさを媒介としてその物を

<sup>55</sup> L'Estoile (2007B).

<sup>56</sup> pp. 12-13, Martin (2007) p. 16.

<sup>57</sup> Taylor (2008) p. 681.

<sup>58</sup> Descola (2007) pp. 149-151.

作り出した人々への共感を誘い、感情的・審美的なレベルで「他者」と「われわれ」との境界を越えさせようというのである。MQBの美的感覚重視の展示方法は、従来の民族誌博物館における学術志向の展示への批判であると同時に、「われわれ」の中に「他者」が存在し「われわれ」自身も「他者」の一部であるという認識の行き着く先でもあったということが分かる。植民地支配と結びついてきた人類博物館に代表される従来の展示方法を斥け、美術という新たなパートナーを迎えたという特徴にこそ、MQBなりの植民地支配の過去に対する姿勢が現れているのである。しかしこのように植民地支配と結びつくものとして民族学を糾弾し斥けようとする論調は不当で、ケルシャッシュの言説に乗せられているだけだとデュペーニュは反論する。

民族学を離れて美術に重点を移すことによって植民地博物館としての出発点から脱皮を図ろうという試みにはMAAOの先例がある。MAAOではアボリジニの芸術家による現代美術の作品を積極的に展示するなどして、人類博物館との差別化に努めてきた<sup>59</sup>。しかしMAAOの建物は、元々1931年の植民地博覧会会場内の植民地博物館だったものである。MAAOとMQBとの違いは、植民地支配の記憶を伝える建物をそのまま利用しつつけるか、新たな場所ですべて新しい関係を志向するかにある。人類博物館はかつての万国博覧会会場シャイヨー宮の中に

ある。ATPは1930年代まで植民地から人々を呼び寄せて生活を展示していた熱帯植物園内の温室跡地に建つ。MQBの計画と同時に幕を引いたこれらの施設は、どれもフランスの植民地支配を象徴する場所に存在した。これらの場所と袂を分かち、民族学とも距離を置いて、新たなビジョンを示すための新天地がケ・ブランリーだということである。

しかしながら、ここで言う展示の「美しさ」とはあくまで西洋文化における基準に適ったものにすぎない。物を製作した土地の人々が感じる「美しさ」と、西洋人が満足する「美しさ」とは当然同じものではない。上述の意図は理解できるが、MQBのしていることは「非西洋」における美的感覚やそれに伴う感情を、西洋文化の審美眼を通して解釈し、その解釈の産物を展示で表現しているにすぎないのである。したがって観客には、西洋的に味付けされた「美しさ」によって「非西洋」の文化を理解した気になさせてしまうという危険な側面もある。また、このような「もの」の再文脈化は政治的・文化的権力の発露とも読み取れる<sup>60</sup>。またメアリー・ダグラスが期待を込めて紹介したロンドンの博物館の事例のように、移民たちに対してあなた方のルーツの文化はこれほど美しいのだと教育する場として博物館が機能するべきというのであれば<sup>61</sup>、それは彼らの祖先が製作した文

<sup>59</sup> Myers (1995).

<sup>60</sup> Price (2007) pp. 88-97.

<sup>61</sup> すでに引用した箇所だが、pp. 148-149, 383.

化財が西洋文化において美的価値を与えられているという事実を知らせるにとどまらず、彼らの文化を西洋の審美眼が侵略していくような事態につながるだろう。こうした危惧が本会議録では一つも見当たらないということに不安が残る。

今述べた点で明かなように、MQB の言説には「われわれ」の立ち位置に関してやや無自覚なところがある。「諸芸術・諸文化の間にヒエラルキーが存在しないのと同様に、諸民族の間にもヒエラルキーは存在しない」とシラク大統領は演説した。そのような姿勢での対話を掲げているにもかかわらず、「非西洋」の諸文化の展示を謳う MQB では当然ながら西洋文化の展示が存在しない。しかしその不在ゆえに「非西洋」を観察する主体は他ならぬ西洋であるという前提があまりに明白で、見る者は否応無しに「西洋」という「われわれ」の立場に引きずり込まれてしまう<sup>62</sup>。日本という非西洋地域から MQB に来た身にはこの引力が痛感させられる。「他者」「われわれ」が完全に西洋のまなざしによって規定されている展示では、一般の観客にとっては両者の差異を強調しているようにしか見えないかもしれないとプライスは指摘する<sup>63</sup>。MQB における西洋の不在は、自民族中心主義の表出と批判されるほど強力なインパクトを見

る者に与える<sup>64</sup>。そもそもアール・ブルミエとして「他者」の文化を再解釈する行為自体、西洋美術が新たな領域を開拓していった結果であるため本質的にコロニアルなものであり、一歩間違えば MQB は単なる異文化趣味にしかならないとさえ批判される<sup>65</sup>。そのことにどの程度 MQB の意識が及んでいるか定かではない。ただ館長は初年度の統計で見込よりも外国人の客が少なかったことについて、世界中から外国人観光客が押し寄せるパリという立地にあって不思議だとコメントしている<sup>66</sup>。はじめから西洋人以外には共感しづらい仕組みで出来ているのだから無理もない。諸文化の対話の場であるはずなのに対話したい相手である西洋文化がそこにはないのは、非西洋の者から見れば不自然であり残念でもある。

そこで、アール・ブルミエを専門とする美術館に対する提案としては現実的でないのかもしれないが、西洋文化の歴史もまた同じ土俵に置いて「われわれ」を相対化するべきではないだろうか。本稿で見てきたような MQB をめぐる種々の論点は必ずしも「非西洋」にだけ生じるとは限らない。本会議録でも、宗教性の展示や無形遺産の保存に関する問題は西洋文化にも共通するということが指摘される。フランス北西

<sup>62</sup> Choay (2007) p. 59.

<sup>63</sup> L'Estoile (2007B) p. 99.

<sup>64</sup> Martin (2007) pp. 13-14. 来館者全体の2割ほどが外国人観光客で、内訳はヨーロッパ人、アメリカ人と続き、パリに大勢観光に来る日本人や中国人等のアジア人はごく少数。ほか、パリ居住者が全体の25%とこれも予想より少なく、かわりにフランスの地方から来た観光客が35%を占める。

<sup>62</sup> L'Estoile (2007B) p. 99. 引用箇所はシラク大統領の開館記念演説から。

<sup>63</sup> Price (2008) p. 191.

部ブルターニュ地方のフィニステール県にある修道院付属文化センターでは、文化財を展示するにあたって必ず脱神聖化するという。物に備わる宗教的な要素を取り除き、修道院の中にわざわざ世俗的空間を設けた上で、一般客向けに文化財として公開するのである。物に神聖さを見てとるのは決して「非西洋」に限ったことではなく、現代のヨーロッパの文化でも同様だということが今日あまりに忘れられている<sup>67</sup>。

以上のような課題に対して、MQB が今後「われわれ」「他者」の扱い方を少しずつ変えていくかもしれないと思わせるのは、2008 年 3 月から開催されているセルジュ・グリュジンスキ監修の「混血の惑星 (Planète métisse)」という小企画展である。ここでは古今東西の文化混合をテーマとしつつ、視点の複数性を強調し、諸文化間の主体／客体関係の相対化を追求していく方向性が打ち出されている<sup>68</sup>。数年内に開館が予定されている MUCEM は、すでに触れたように地中海沿岸地域という西洋と非西洋とにまたがる広域な文化圏を対象とする。MQB が「非西洋」に特化しているのに対して、この MUCEM は「われわれ」と「他者」とをいかに表現するのか。MQB との比較をしながら論じることで新たに见えてくることがあると予想される。今後の動向を引き続き見守りたい。

## おわりに

以上見てきたように、MQB はアール・ブルミエの美術館であると同時に、新たな民族誌博物館の姿でもある。美術館にしては民族学・人類学的な色が濃く、民族誌博物館にしては洒落ている。何よりもまずアール・ブルミエの価値を高めるという政治的・文化的目的のために作られた施設がこうした形態をとることになったのは、人類博物館や ATP に代表されるような学術志向の展示を長らく固持してきた民族誌博物館のあり方への異議ゆえのことだった。現実的に見て、旧来型の博物館の採算の悪化が切実になり、再び人々の心をつかむような施設が待望された。また移民の増加により現代フランス社会が変化している状況の中、普遍的な知識を与える場という使命によって植民地支配の時代に建設された人類博物館では時代の変化に対応しきれなくなった。MQB の特徴である美的感覚を重視した展示には、民族誌的資料を美術品として扱う以上に、今日の社会における他者性の変化を展示上で表現するという意図も込められていた。展示品の美しさへの感動が「他者」への共感を生み、それを媒介に「他者」と「われわれ」との境を越えさせるという狙いである。展示品が元々の文化の中で発揮していた力はその物の美しさと不可分であることを踏まえ、物の来歴を踏まえた文脈作りを展示室で行なおうとして、美しさを際立たせうる演出法が採用された。しかしながら、それは西洋的美的感覚に

<sup>67</sup> p. 173 (Pierre Nédélec ブルターニュ地方フィニステール県の修道院の文化センター)。

<sup>68</sup> この展覧会のカタログは Grusinski (dir.) (2008)、2009 年 7 月 19 日まで開催予定。

よる解釈に支えられた演出にすぎない。

本会議録の表題は「諸文化の対話」だが、ここで試みられている対話には大きく分けて二つの性質がある。すなわち非西洋文化と西洋文化との間の対話、そして旧宗主国と旧植民地との間の対話である。対話の結果、MQB に望まれているさまざまな社会的役割が明らかになった。旧植民地の博物館と協力関係を結び援助すること、移民たちに対して彼ら自身の文化に関する知識を豊かにさせることなどである。ただし MQB では「われわれ」から見た「他者」という図式が再生産されることが危惧される。本書中に非西洋文化からの西洋文化に対する異議申し立て、つまり西洋的・フランス的心性を相対化できるのかという問いかけが至るところで見られたが、これもつまるところはこの点を批判している。

美術館として存在することで植民地支配と結びついてきた民族学・人類学の影響力を相対的に弱め、それとともに万博や植民地博の遺構を捨ててケ・ブランリーという新天地で新たなタイプの施設としての一步を踏み出したという事実こそ、MQB が過去の歴史をどう解釈し、これからどう向き合っていくかという姿勢が現れている。これに関して、館長は地名だけを冠したネーミングに格別のこだわりを見せている。当初政府は「アフリカ・アジア・アメリカ・オセアニア芸術・文明美術館」という長い名称を提案した。ほかにも「アール・ブルミエ美術館」

「シラク美術館」等、有力な対案が複数あった。しかし彼やヴィアット氏らは、新施設の活動内容を示す言葉を具体的に名前に掲げることは避けたかった。なぜならその名称のせいで使命があらかじめ限定されてしまう恐れがあるからである。ただ地名だけを掲げることで、この新たな場所に建つ施設に無限の可能性を託したのである<sup>69</sup>。

本会議録は全体的に MQB の言説の宣伝と読めなくもない。しかしこれをきっかけに現代と学問との関係、社会と学問との関係を考えさせるのに十分な一冊である。本稿で指摘したように、MQB には課題も少なくない。しかしまだ誕生したばかりである。諸文化の対話の場として世界中に開かれていくことと今後の発展とを願ってやまない。

<sup>69</sup> Martin (2007) pp. 8-10, Viatte (2000) pp. 75-80.

## 引用文献

- APIAH Kwame Anthony (2008) « De qui est-ce la culture? », *Le débat*, 148, pp. 158-169.
- CHIVA Issac (1985) « Georges-Henri Rivière : un demi-siècle d'ethnologie de la France », *Terrain*, 5, pp. 76-83.
- CHOAY Françoise (2007) « Un nouveau Luna Park était-il nécessaire? », *Le débat*, 147, pp. 57-64. (初出は *Urbanisme* 誌 2006 年 9 月号)
- COIFFIER Christian (2008) « Quels budgets pour l'achat de collections contemporaines? », *Ethnologie française*, 4, pp. 659-664.
- DESCOLA Philippe (2007) « Passages de témoins », *Le débat*, 147, pp. 136-153.
- DIAS Nélia (1991) *Le musée d'ethnographie du Trocadéro (1878-1908)* : *Anthropologie et muséologie en France*, Paris : Ed. du CNRS.
- (2007) « Le musée du quai Branly : une généalogie », *Le débat*, 147, pp. 65-79.
- GRUZINSKI Serge (dir.) (2008) *Planète Méti*, Paris : Musée du quai Branly / Actes Sud.
- DUPAIGNE Bernard (2006) *Le Scandale des arts premiers : la véritable histoire du musée du quai Branly*, Paris : Mille et une nuits.
- (2008) « Au Musée de l'Homme : la disparition des ethnologues », *Ethnologie française*, 4, pp. 645-648.
- et Jacques GUTWIRTH (2008) « Quel rôle pour l'ethnologie dans nos musées? », *Ethnologie française*, 4, pp. 627-630.
- GUIBAL Jean (1992) « Quel avenir pour le musée des A.T.P.? Entretien avec Jean Guibal », *Le débat*, 70, pp. 157-163.
- LE FUR Yves (dir.) (2006) *D'un regard l'autre*, Paris : Musée du quai Branly / Réunion des Musées Nationaux.
- L'ESTOILE Benoît de (2007A) *Le Goût des autres. De l'exposition coloniale aux arts premiers*, Paris : Flammarion.
- (2007B) « L'oubli de l'héritage colonial », *Le débat*, 147, pp. 91-99.
- (2008) « L'anthropologie après les musées? », *Ethnologie française*, 4, pp. 665-670.
- MARTIN Stéphane (2007) « Un musée pas comme les autres. Entretien », *Le débat*, 147, pp. 5-22.
- MAUZÉ Marie et Joëlle ROSTKOWSKI (2007) « La fin des musées d'ethnographie? Peuples autochtones et nouvelles perspectives muséales », *Le débat*, 147, pp. 80-90.
- MONJARET Anne, Mélanie ROUSTAN, Jacqueline EIDELMAN (2005) « Fin du MAAO : un patrimoine revisité », *Ethnologie française*, 4, pp. 605-617.
- MYERS Fred R. (1998) « Question de regard. Les expositions d'art aborigène australien en France », traduit de l'américain par Claudie VOISENAT, *Terrain*, 30, pp. 95-112.
- PRICE Sally (2007) *Paris Primitive : Jacques Chirac's Museum on the Quai Branly*, Chicago : University of Chicago Press.
- (2008) « Réflexions sur le dialogue des cultures au musée du quai Branly », traduit de l'anglais par Camille NOËL, *Le débat*, 148, pp. 179-192. (前掲書 *Paris Primitive* を基にした論文)
- SCHAEFFER Jean-Marie (2008) « Le musée du quai Branly entre art et esthétique », *Le débat*, 148, pp. 170-178.
- SEGALEN Martine (2008) « L'Europe et ses ethnologies », *Ethnologie française*, 4, pp. 581-582.
- TAYLOR Anne-Christine (2008) « Au Musée du Quai Branly : la place de l'ethnologie », *Ethnologie française*, 4, pp. 679-684.
- VENTURA Christelle (2006) *La fondation du musée du quai Branly. Matériaux pour une anthropologie politique et culturelle d'une institution*, thèse : École des Hautes Études en Sciences Sociales, Paris.
- VIAITE Germain (2000) « Un musée pour les arts exotiques. Entretien avec Germain Viatte », *Le débat*, 108, pp. 75-84.
- (2007) « Primitivisme et art moderne », *Le débat*, 147, pp. 112-123.

ジャン・キューズニエ、マルティーン・セガレン（1991）『フランスの民族学』樋口淳・野村訓子訳、白水社（文庫クセジュ）；原著1986年。

竹沢尚一郎（2001）『表象の植民地帝国』世界思想社。

西野嘉章（1995）『博物館学—フランスの文化と戦略』東京大学出版会。

リュック・ブノワ（2002）『博物館学への招待』水嶋英治訳、白水社（文庫クセジュ）；原著1971年。

松浦晃一郎（2008）『世界遺産—ユネスコ事務局長は訴える』講談社。

吉田憲司、ジョン・マック編（1997）『異文化へのまなざし：大英博物館と国立民族学博物館のコレクションから』NHK サービスセンター。

#### 辞典

REY-DEBOVE Josette et Alain REY (dir.) (2007) *Le Nouveau Petit Robert de la langue française*, Paris, Le Robert.

（しみず ゆみこ・東京外国語大学大学院博士後期課程）

## 258 パリのケ・ブランリー美術館を読む

ケ・ブランリー美術館開館記念会議 登壇者一覧 (姓の ABC 順)

(*Le dialogue des cultures*, pp. 421-429 より)

会議録にはここに挙げた登壇者以外の会場からの発言も多数収められている。

名前	身分、役職	国、地域
クワメ・アンソニー・アピアー Kwame Anthony Appiah	プリンストン大学哲学・アフロアメリカン研究教授	アメリカ
ローラン・バイル Laurent Bayle	シテ・ド・ラ・ミュージックおよびサル・ブレイエル館長	フランス パリ
セドン・ベニントン Seddon Bennington	テ・ノ・パ・トンガレワ博物館館長	ニュージーランド
アンヌ＝マリー・ブティオー Anne-Marie Bouttiaux	民族学者、テルヴェーレン王立アフリカ中央博物館研究員	ベルギー
ステファン・ブルトン Stéphane Breton	人類学者、演出家	フランス
ジュヌヴィエーヴ・カラム＝グリオール Geneviève Calame-Griaule	民族学者	フランス
マヌエラ・カルネイロ・ダ・クーニャ Manuela Carneiro Da Cunha	サンパウロ大学教授	ブラジル
ナイマ・シカウイ Naïma Chikhaoui	人類学者、国立ラバト考古学・文化遺産研究院教授	モロッコ
カトリーヌ・クレマン Catherine Clément	哲学者、小説家、MQB 市民大学責任者	フランス パリ
ジェームス・クリフォード James Clifford	人類学者、カリフォルニア大学教授	アメリカ
ミシェル・コラルデル Michel Colardelle	ATP、MUCEM 館長	フランス



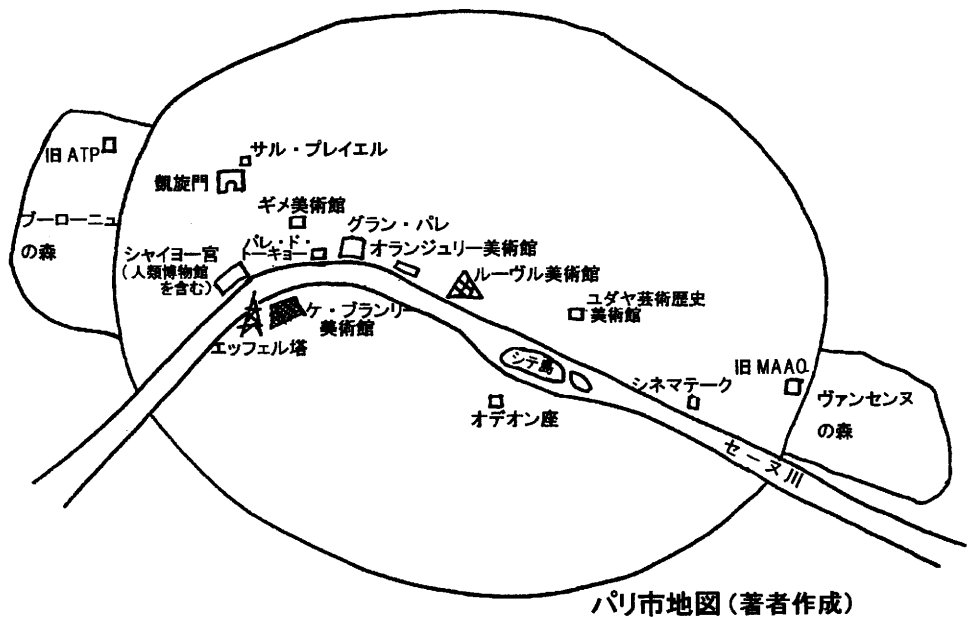
名前	身分、役職	国、地域
アリッサンドラ・クミンズ Alissandra Cummins	国際博物館会議 (ICOM) 議長、パレルバド ス博物館館長、ブリッジタウン歴史協会 会長	パレルバドス
ユベール・ダミシュ Hubert Damisch	哲学者、美術史家、社会科学高等研究院 (EHESS) 教授	フランス パリ
ブリジット・デルロン Brigitte Derlon	EHESS 社会人類学研究所准教授	フランス パリ
フィリップ・デコラ Philippe Descola	民族学者、EHESS 社会人類学研究所所長	フランス パリ
エマニュエル・デヴオー Emmanuel Désveaux	民族学者、MOB 館長特任研究員	フランス パリ
ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン Georges Didi-Huberman	美術史家、哲学者、EHESS 准教授	フランス パリ
ママドゥ・デューフ Mamadou Diouf	歴史家、アナーバー大学教授	アメリカ ミシガン州
メアリー・ダグラス Mary Douglas	人類学者、ロンドン大学	イギリス
ティエリー・デュフレヌ Thierry Dufrêne	パリ第10大学ナンテール校美術史教授、 国際美術史委員会	フランス パリ
ダニエル・ファーブル Daniel Fabre	人類学者、EHESS 教授	フランス パリ
クリスティアン・フィースト Christian Feest	ウィーン民俗学博物館館長	オーストリア ウィーン
ジョン・フリーデ John Friede	収集家、MOB 収蔵委員会	アメリカ、フランス
パスカーレ・ガッリアルディ Pascale Gagliardi	ジョルジョ・チーニ財団事務総長	イタリア

名前	身分、役職	国、地域
モーリス・ゴドリエ Maurice Godelier	人類学者、EHESS 名誉教授	フランス パリ
アラン・ゴドヌー Alain Godonou	アフリカ遺産研究院学長	ベナン ボルトノーヴォ
ドニ・ゴンタール Denis Gontard	歴史家、劇場技術研究家、モンペリエ大 学名誉教授	フランス モンペリエ
セルジュ・グリュジンスキ Serge Gruzinski	歴史家、国立科学研究所 (CNRS) 教授、 EHESS 教授	フランス パリ
ロベルト・アマヨン Roberte Hamayon	高等研究実習院 (EPHE) 宗教学教授、 モンゴル・シベリア研究所責任者	フランス パリ
ロミュアル・アズメ Romuald Hazoumé	彫刻家	ベナン
アニータ・ハール Anita Herle	ケンブリッジ大学考古学・人類学博物館 人類学学芸員	イギリス
スティーヴン・フーパー Steven Hooper	セインズベリー・アフリカ・オセアニ ア・アメリカ大陸芸術研究所所長、 イースト・アングリア大学	イギリス
ソフィー・ウダール Sophie Houdart	人類学者、パリ第 10 大学ナンテール校教 授	フランス
カーク・ハフマン Kirk Huffman	人類学者、民族学者、博物館学研究者	オーストラリア
フィリップ・ジョーンズ Philip Jones	人類学者、南オーストラリア博物館研究 員	オーストラリア
エマニュエル・カサレルー Emmanuel Kasahérou	チバウー文化センター館長	ニューカレドニア
クリスティアン・カウフマン Christian Kaufmann	元バーゼル美術館オセアニアコレクショ ン学芸員	スイス

名前	身分、役職	国、地域
ブリュノ・ラトゥール Bruno Latour	哲学者、パリ政治学院教授	フランス パリ
ミシェル・ル・ブリ Michel Le Bris	作家、サン＝マロ映画祭創始者	フランス サン＝マロ
イヴ・ル・フェール Yves Le Fur	MQB 常設展責任者	フランス パリ
マドレーヌ・ルクレー Madeleine Leclair	MQB 楽器コレクション責任者	フランス パリ
エレーヌ・ルルー Hélène Leloup	収集家、アフリカンアート専門家	フランス
ローラン・レヴィ＝ストロース Laurent Lévi-Strauss	ユネスコ文化遺産事務局長補佐	フランス パリ
アンリ・ロワレット Henri Loyrette	ルーヴル美術館理事長兼館長	フランス パリ
ジョン・マック John Mack	イースト・アングリア大学美術史教授	イギリス
シャルル・マラムー Charles Malarnoud	人類学者、EPHE 名誉教授	フランス パリ
ダニエル・マクシマン Daniel Maximin	作家、フランス語圏祭（フランコフォニー・フェスティバル）文学・教育担当	フランス
トリン・T・ミン＝ハ Trinh T. Minh-Ha	演出家、作家、詩人、作曲家	ヴェトナム（アメリカ在住）
クラウディウス・ミュラー Claudius Müller	国立ミュンヘン民族博物館館長	ドイツ
ドナシアン・ミュヤ・ワ・ビタンコ Donatien Muya Wa Bitanko	国立ルムンバシ博物館館長	コンゴ民主共和国

名前	身分、役職	国、地域
マイケル・オハンロン Michael O'Hanlon	人類学者、オックスフォード・ビット＝ リヴァース博物館館長	イギリス
ジャン＝マルク・パンブリュン Jean-Marc Pambrun	タヒチ諸島博物館館長	フランス領ポリネシア
フィオナ・パーディングトン Fiona Pardington	写真家	ニュージーランド
ジャン＝ルー・ピヴァン Jean-Loup Pivin	ルヴュ・ノワール出版代表	フランス
ジャン＝マルク・ポワンソ Jean-Marc Poinso	国立美術史研究院 (INHA) 研究科長	フランス パリ
オリヴィエ・ポワール・ダルヴォール Olivier Poivre D'Arvor	キュルチュールフランス (Cultures France) 代表	フランス
ラルフ・ルジェンヴァニ Ralph Regenvanu	ヴァヌアツ文化センター館長	ヴァヌアツ
ジュディス・ライアン Judith Ryan	国立ヴィクトリア美術館 (NGV) アボリ ジニ芸術学芸員	オーストラリア
マルチヌ・セガレン Martine Segalen	パリ第10大学ナンテール校社会学・民族 学教授	フランス
カルロ・セヴェリ Carlo Severi	人類学者、CNRS 教授	フランス パリ
サミュエル・シディベ Samuel Sidibé	国立バマコ博物館館長	マリ
ウスマン・ソウ Ousmane Sow	彫刻家	セネガル
ミン・チャンボ Ming Tiampo	カールトン大学美術史教授	カナダ

名前	身分、役職	国、地域
ジェルマン・ヴィアット Germain Viatte	MQB 館長付き顧問兼博物館学責任者	フランス パリ
エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ Eduardo Viveiros de Castro	人類学者、国立リオデジャネイロ博物館教授	ブラジル
スーザン・ヴォジェル Susan Vogel	コロンビア大学アフリカンアート学教授	アメリカ
アラン・ウェバー Alain Weber	民族音楽企画者、シテ・ド・ラ・ミュジックおよびMQB 音楽相談役	フランス パリ
アンドラ・ゼンプレーニ Andras Zempleni	民族学者、CNRS 教授	フランス パリ



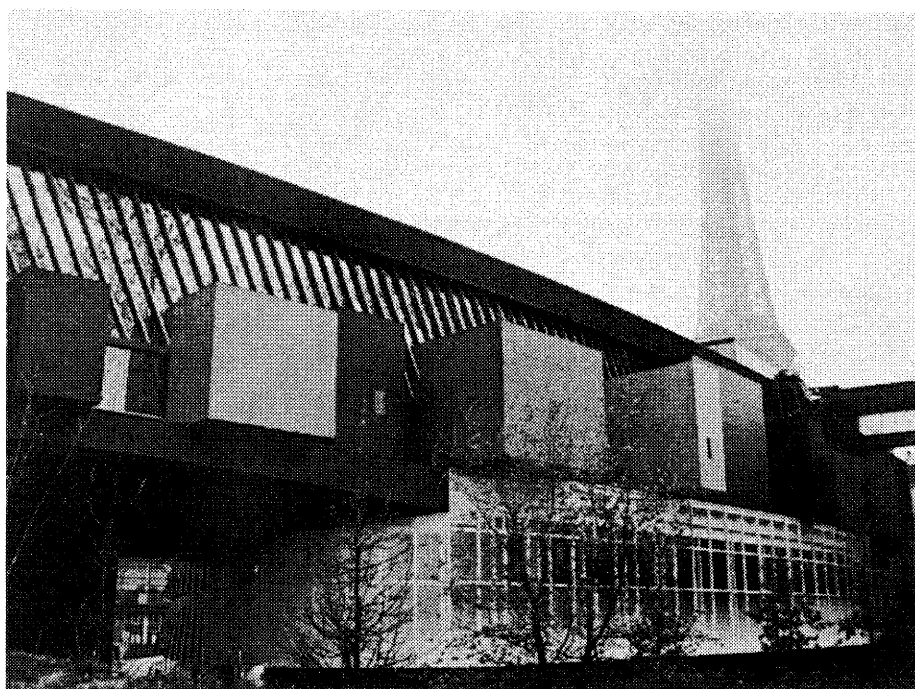


写真1「ケ・ブランリー美術館外観」(著者撮影)



写真2「ケ・ブランリー美術館裏庭 背景には住宅街」(著者撮影)

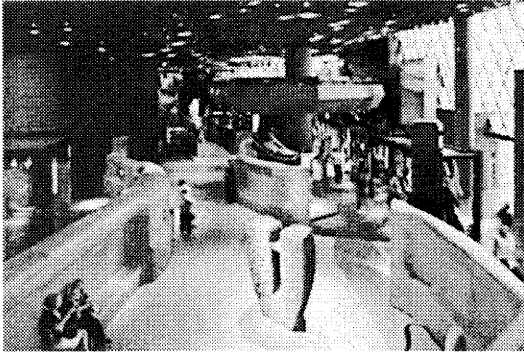


写真3

ケ・ブランリー美術館 常設展示室の様子  
(2006年6月撮影)

© Musée du quai Branly, photo Nicolas Borel

写真4

常設展 アジア (2007年3月撮影)

© Musée du quai Branly, photo Lois Lammerhuber

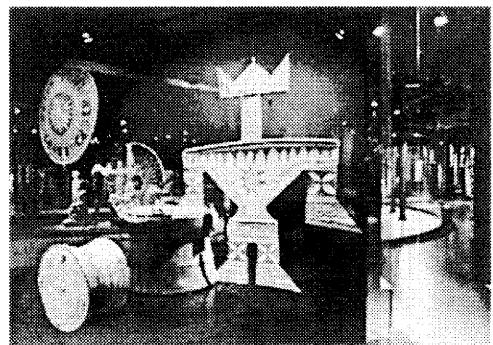


写真5

常設展 南北アメリカ (2006年7月撮影)

© Musée du quai Branly, photo Nicolas Borel





写真6

常設展 アフリカ (2007年3月撮影)

© Musée du quai Branly, photo Lois Lammerhuber



写真7

常設展を見る来館者 (2008年11月撮影)

© Musée du quai Branly, photo Pomme Celarie